地域の実態を把握し、住民とともに地域の未来を支える人材を育成

高知大学 地域協働学部

地域への取材を通じて、振興に向けたアイデアを練り、具体化させていきます

２・３年次には、同じ地域に関心を持つ学生がグループになり、実習に取り組みます。２年次１学期には、１つのグループが２～３の少人数チームに分かれ、チームごとに取材や調査をして地域振興策を立案。２学期の初めにグループ内で発表し合い、グループとして具体化させる振興策を決めます。（拝藤（はいとう）さん）

異世代間の交流を持続的に促進できるよう、取り組みを企画・実施しました

私たちの実習先では、少子高齢化が進み、地域の伝統文化が継承されないという課題がありました。そこで、異世代間の交流を持続的に促進できるよう、地域の小学校と連携し、子どもが地域の高齢者に伝統文化などを学ぶ取り組みを企画。２年次２学期から定期的に実施しました。私たちも、江戸時代から続く地域産業の和紙づくりを体験しました。（幸村（ゆきむら）さん）

実習に協力してくれた地域の人たちに感謝の気持ちを改めて伝えます

２・３年次の終わりには、地域の人たちに向けた学習成果報告会を実習先で行います。実習に協力してくれたことへの感謝の気持ちも、改めて伝えました。協働には、そうしたコミュニケーションが欠かせないと思います。（幸村さん）

連携先の地域組織や住民らと協働し、地域振興を図る

高知大学地域協働学部は、地域の住民や自治体などと連携して地域振興を担う人材を育てるために設立された。法律や環境など、地域課題に関連する様々な分野の科目を開講するとともに、地域の実態を理解した上で具体的な方策を提案できるようにするために、フィールドワークを重視した、２つの柱を設けている。

１つは、１～３年次に週１回、４時限連続で設定される実習だ。１年次には、大学が連携協定を結ぶ県内の複数の地域組織を訪問し、地域の人たちと交流しながら、各地の魅力や課題を探る。そして、２・３年次

地域協働学部
地域協働学科４年
幸村ひかる
ゆきむら・ひかる
沖縄県立向陽高校卒業。コミュニケーションを通じた地域の問題解決に関心があり、同学科に入学。

地域協働学部
地域協働学科３年
拜藤紘希
はいとう・ひろき
広島県立海田（かいた）高校卒業。多くの学問を横断的に学べる点に魅力を感じ、同学科に入学。

には、1年次の訪問先から関心がある地域を1つ選択し、同じ地域を選んだ学生同士がグループになって、振興策を練り上げる。3年生の拝藤紘希さんら10人のグループは、県の西南部の沿海地域で実習を行っている。同地域では、観光施策の目玉として、県の出資を受けたNPO法人が漁師と協働でホエールウォッチング事業を実施しているが、思うような業績が上がらなかったため、拝藤さんらはその原因解明に取り組んだ。

「県やNPO法人の職員、漁師にインタビュー調査を行うと、改善したい点などが三者の間で食い違っており、コミュニケーションに課題があることが分かりました。そこで、三者が互いの考えを共有できるようSNSの活用を提案し、その環境の整備を進めています」（拝藤さん）

1年次から自由に研究を積み重ね、卒業論文を作成

もう1つの柱は、学生一人ひとりが自由にテーマを決め、休日や長期休業期間なども活用して取り組む研究活動だ。1～3年次には「地域協働研究」の授業で定期的に研究の進捗を発表し、4年次には研究の成果を卒業論文にまとめる。

4年生の幸村ひかるさんは、1年次に県産のイノシシや鹿の肉を用いた料理を食べ、そのおいしさに感動したことなどがきっかけで、「野生鳥獣の利活用」を研究テーマに設定。県内各地の猟師や、猟師から獲物を購入する食肉処理施設を繰り返し訪問し、聞き取り調査を重ねた。その結果、猟師間では、「狩猟の場所を巡るトラブルの発生」、食肉処理施設では、「在庫量が多い鳥獣の買い取りを断らざるを得ないことによる猟師との関係悪化」などが、課題として見えてきたという。

「ジビエ（＊）の人気が高まっている現在、野生鳥獣は地域振興のための貴重な資源になります。しかし、県内の狩猟や食肉処理の現場についての研究は少なく、実態がよく分かっていませんでした。そこで、卒業論文は、県内の野生鳥獣の利活用を促進する上での課題と、その要因分析をテーマにすることにしました」（幸村さん）

授業で習得した知識・技能がフィールドワークを支える

フィールドワークでは、授業で学習した内容を活用する場面が多いという。具体的には、地域行政についての授業で自治体における意思決定の仕組みを学んだことが、県の職員へのインタビュー調査に役立ったと、拝藤さんは語る。

「自治体の各部署への質問内容を前もって精選できたことで、効率的に取材を行えました。また、『ファシリテーション演習』では、相手の目を見て話し、相づちを打つなど、相手が本音で話しやすくなるような雰囲気づくりの工夫を学びました。そのスキルが、フィールドワークでの多様な人たちとのコミュニケーションに生きました」

同学部では、地方企業など、地域の経済や暮らしを支える職場に就職する卒業生が多く、地域貢献への意欲の高さがうかがえる。幸村さんは、高知県庁への就職が内定した。

「4年間の学びを通して、地域課題の当事者と向き合うことの大切さを実感しました。そこで、常に地域のニーズをくんで、それを具体的な施策に反映させられるよう、公務員の道を選びました。将来的には鳥獣対策課に所属し、自分の研究成果を職務に生かしたいと考えています」

大学の思い

地域課題を粘り強く探究し、解決策を見いだしてほしい

地域協働学部
教授
内田純一
うちだ・じゅんいち

本学部では、学生がフィールドワークで得た学びを深められるよう、カリキュラムを工夫しています。例えば、フィールドワークを通して、学生は自分に不足している知識・技能に気づきます。そこで、実習や研究が本格化する2年次以降の自由選択科目は、地域の産業や生活と密接に関連する専門科目を中心に構成し、学生が必要に応じて履修できるようにしました。フィールドワークと座学を往還することで、学生の探究心も向上していきます。

フィールドワークでは、学生は自分の思い通りにいかない状況に直面します。地域課題は、様々な要因が複合して発生するケースが少なくないからです。つまずくことがあれば、まずは必ず学生同士で相談し合うように伝えています。協働しながら粘り強く試行錯誤を重ね、課題を乗り越えてほしいからです。学生は、入学当初は「自分のために学ぶ」という意識でいますが、地域の課題を知る中で、「他者のためにともに学ぶ」ことの大切さに気づきます。そうした姿勢にこそ、学問・学徳の本質があると私は考えています。

＊ フランス語「gibier」。狩猟によって捕獲され、食用される野生鳥獣の肉。